

ぼくは、今まで事件や事故に関わったことは一度もない。それはとても幸せなことだと心から思う。でも、テレビや新聞では、毎日のように事件や事故の報道が流れている。ぼくは、そんなニュースを聞くと、どうしてそんなひどいことができるのだろう、この人は何を考えているのだろうと、信じられない思いがする。そして、いつも恐怖を感じたり、嫌な気分になったりしていた。

でも、この「社会を明るくする運動」のことをくわしく知りたくて、インターネットで調べたり、家族の話を開いたりして、その考えが変わってきた。ぼくも、社会の一員として、世の中で起きていることを、自分には関係ないこととして考えていてはいけないことに気づいた。そして、まずは今まで目を向けることがなかった罪を犯す人がかかえていた事情について考えてみることにした。

よく新聞を読んだり、ニュース番組を見たりしていると、罪を犯した人は、家族や友達、会社での人間関係がうまくいかず孤独を感じていたり、仕事やお金がなく生活するのが大変だったり、病気や障害があつたりして、生きる喜びを感じられない人や、社会の中で思ったように生きていけない人が多いことが分かった。

そのような人たちが社会に復帰するとき、その人たちを受け入れる社会が今までと同じだったらどうなるのだろう。一度罪を犯した人は、前に罪を犯したからといって、まわりから差別を受けたり、冷たい目で見られたりすることもあるそうだ。そんな社会だったらまた同じような気持ちになり、再び罪を犯してしまうかもしれない。

ぼくの祖母は、何年も民生委員、児童委員をしている。近くで火事が起きたり、救急車が来たりすると、すぐに様子を見に行く。また、家には、一人暮らしのお年寄りや障害をもった人、一人親家庭の人など色々な立場の人が、様々なことを相談しに来る。そんなとき祖母は、どんなことで困っているのかよく話を聞いて、市役所や警察などに連絡をして、どうすればいいか聞いたり、いっしょに相談に行ったりしている。問題が解決したときには、相談しにきた人たちは、明るい顔をして帰っていく。そんな様子を見てみると、困っている人とその問題を解決できる人とをつなぐ、祖母のような役割をする人も大切なのだと思う。こんなふうに、人と人とをつないでくれる人が身近にいれば、救われる人もたくさんいるはずだ。

今のぼくには、祖母のように大きな仕事はできないけれど、何かできることはないだろうか。ぼくは、地域の人に自分からあいさつをしたり、外国人の友だちとも仲良くしたりして、人とのつながりを広げていきたい。そして、そのつながりの中で困っている人がいたら、進んで声をかけ、どうすればいいのかを一緒に考えたい。もし、その問題が自分たちでは解決できないようなときには、先生や家の人にも話し、祖母のように人と人とをつなぐ役割も果たしてい